

自己表現としての着こなし



軽部 謙介
時事通信社 解説委員

いよいよ大統領選挙の季節だ。共和党のトランプ大統領に挑む民主党の候補者たちは自らの政策売り込みに余念がない。一方、受けて立つトランプ氏も弾劾の危機に強気の姿勢を崩さない。だが、ワシントンの政治闘争で重要なのは、自らを「大統領にふさわしい」と見せる技術なのだそうだ。

トランプ流のファッション

テレビでトランプ氏を見かけると、いつもネクタイが目がいってしまう。色は派手な赤系が好みのよう。

結び方にも特徴がある。普通の男性はベルトのやや下のあたりに端をもって来るが、この大統領の結び方は違う。かなり下まで垂らしている。「彼の長すぎるネクタイ (his too-long ties)」(米紙) は、「だらしない」という印象を与えるが、結び方を変えないことで、すっかりトレードマークになってしまった。

就任当初、米メディアに「正常な着こなし方ではない」などと酷評されたトランプ氏は、1コマ政治漫画の絶好の対象になった。米紙に掲載される漫画のトランプ氏は、どれもネクタイを紐のようにぶら下げている。

米国の政治家の多くは、地味なものよりも派手な色目のものを好むが、特にトランプ氏のネクタイは明度・彩度の高いものが多い。そのどぎつい色彩がだらんと首から垂れているのだから、どうしても印象に残る。案外、政治家・トランプ氏は計算づくかもしれない。

考えてみれば、長女のイバンカさんはファッションブランド「イバンカ・トランプ」を運営していたのだから、着こなしには関心のある一家のはずだ。

ただ、このような派手なネクタイは、ホワイトハウスにピッタリ。

ウエストウイング（西棟）の大統領執務室（オーバルオフィス）や閣議室は南からの陽光が差し込み明るい、すぐ近くにあるルーズベルトルームをはじめとする部屋や廊下はうす暗い。外部に面した窓がないためだ。

このようなほの暗いホワイトハウスの内部で、トラ

ンプ氏の派手なネクタイはこの異形の大統領の存在をひととき目立たせているに違いない。

ちなみに、「イバンカ・トランプ」のブランドは場外戦で有名になった。トランプ氏が大統領就任直後のことだったが、テレビに出演した側近のコンウエー大統領顧問が「イバンカ・トランプ」について「とてもすてきで、私もいくつか持っている」「皆さん、きょう買いに行つて」と視聴者に呼び掛けたのだ。

政府倫理局は大統領顧問の行動が倫理規定違反に当たると判断。これにホワイトハウスが反発するなど政治問題化し、このブランドはすっかり有名になってしまった。

その後もイバンカ氏が自らのブランドを着用して公務に出席、「反トランプ派」から不買運動の標的にされるなど、「イバンカ・トランプ」はワシントンで政治ゴシップのネタになっていた。しかしながら、結局は昨年7月、イバンカ氏が「利益相反」を理由に米国内外で事業展開が制限されていることを考慮し自らの名前を冠したアパレルブランドの廃止を決断したことで終焉を迎える。

ただ、娘のブランドがつぶれても、大統領のファッションは変わらなかった。相変わらずの「トランプ流」を貫き、今年6月の訪英時には、ニューヨーク・タイムズ紙に「ファッション外交の死」という見出しで紹介されたほどだ。

イメージ戦略の失敗

米国政治でファッションを含めた「見てくれ」の重要性が認識され始めたのは、大統領選挙にテレビ討論が導入されたころからだろう。

その第一号となったのはケネディ民主党候補と、ニクソン共和党候補の戦いとなった1960年の大統領選挙だ。

このとき、テレビに映った2人は、若くてさっそうとしたイメージを振りまくケネディ、やや猫背で暗い感じのするニクソンと対照的だったというのは有名な話。

それ以降、政治は「見栄え」を大事にするようになるが、同時に若手は先端ファッションも敏感に取り入れた。

たとえば就任時46歳のクリントン大統領は、選挙運動を当時流行していた「ソフトスーツ」で通し、就任式にも同様のスタイルで臨んでいる。

ソフトスーツというのは全体的にダボツとしている背広のデザインだ。上着には肩パットが入り、ズボンも太いものが主流で2タックが普通だった。40年代から50年代にかけて流行していたもので、80年代から90年代にかけて再びトレンドになりつつあった。

こういう背広をさりげなく着こなしてしまうのは当時の政治家でも珍しく、若さのアピールにはなったし、保守的なアイビー系の装いが多かったワシントンの「エスタブリッシュ組」とは違うのだという印象付けに成功した。

ワシントンの専門家たちにいわせると、その逆で失敗したのが、クリントン政権の副大統領だったアル・ゴア氏だ。最近では環境保護の活動で有名だが、副大統領になったところは「ワシントン・エリートの人」「上院議員出身で堅物」というイメージだった。

その後8年間、同じようなスタイルを通して「まじめな政治家」という印象を国民に与えたゴア氏は、2000年の大統領選挙に立候補する。共和党のジョージ・ブッシュ（子）氏との一騎打ちとなったこの選挙は、フロリダ州で勝敗がつかず最高裁判所の判決で決着するという異例の展開となったので、覚えておられる方も多だろう。

ただ、この選挙戦をファッションという観点からみると、ゴア候補はイメージの構築に失敗したのだという。

それは副大統領として「お堅い」という印象を与えていたゴア氏が、突然くだけた格好で全米の遊説を始めたからだ。「あまりにも不自然」と批判され、選挙後には民主党関係者の間でも「ファッション戦略でもっとうまくやれば勝てたかも」などという意見が多かった。

現在佳境を迎えている民主党の大統領予備選挙でも、候補はみなファッションに気を配っているようだ。

ワシントンの政治家はトランプ氏だけではなく一概して赤い色のネクタイを好む。濃紺の背広に合わせると、「強い政治家」のイメージが醸し出されるのだという。はっきりとした青色のネクタイも人気だ。

何回か行われているテレビ討論会を見ても、男性は

紺の背広に赤や青のネクタイといういでたちが多く、女性は紺や赤のジャケットにオレンジや黒のインナーという反対色の組み合わせで締めるというスタイルが多い。

自らの立ち位置の演出

近年、大統領を狙う政治家は自らを「よそ者」と位置づけることが多い。

クリントン大統領はアーカンソー州という米国で最も貧しいといわれている州の知事として、「ワシントンのアウトサイダー」を自認した。

また、現在のトランプ大統領も既存の政治家たちを罵倒することで、ワシントンのエスタブリッシュ組とは違うんだ、自分はあなた方、農民、労働者の味方だ、といったがっているようだ。

そんなときによく登場するのが「インサイド・ベルトウエー」とか「アウトサイド・ベルトウエー」という表現だ。「ベルトウエー」というのはワシントンDCを取り巻くようにして走る州間高速道路495号線のことを指す。この内側にはホワイトハウスや議会議事堂があり米国政治の中枢をなす。

「インサイド・ベルトウエー」といえば、既得権益にまみれた政治家やロビイストが跋扈する特別なエリアという否定的なニュアンスが含まれることが多い。

したがって、選挙戦を戦う政治家にとっても、「アウトサイド・ベルトウエー」に身をおいている、つまり庶民の味方であるという立ち位置が重要で、その小道具としてファッションが使われることも日常茶飯だ。

たとえば、オバマ大統領は地方遊説などに行くとき好んでジーンズを履いた。米国でジーンズは労働者や農業従事者の定番。「自分はアウトサイド・ベルトウエーの人間で、あなた方と同じなのだ」というメッセージがそこには込められている。

もともと、現在主流の細身のスーツを着こなしていたオバマ大統領は、背が高く足が長いので、すらっとしたジーンズ姿は様になっていた。

ジーンズは以前から選挙戦に活用されてきた。たとえば、一時有力な大統領候補となった民主党の元上院議員もジーンズにボタンダウンのワイシャツを着て有権者との集会などに出席することが多かった。この元上院議員の有力な支持基盤は労働組合。「自分は働く皆さんと同じだ」というメッセージを強調したかったものとみられる。途中でスキャンダルが暴露されて選挙戦からは撤退を余儀なくされたが。

20年の大統領選挙に向けてジーンズ姿を強調しているのが、民主党の前テキサス州選出下院議員、ベト・オルーク候補。オバマ前大統領と同様、若さと細身の体系をいかして選挙キャンペーンには洗いざらしのシャツにジーンズというラフな格好が多い。これによって「あなた方庶民と同じ」という印象を有権者に与える戦術とみられる。ただ、同氏は民主党の予備選挙で苦戦を強いられ撤退したが。

もちろん、どこに登場するのも「背広にネクタイ」という政治家も少なくない。多くの場合、白か青のワイシャツを着ることが多く、ネクタイも赤か青で無難にまとめている。

専門家にいわせると、こういうスタイルを崩さない政治家は共和党に多いようで、「まじめな政治家というイメージをつくる」とか、「ビジネス界出身であることを前面に出したい」などという理由なのだそうだ。

トランプ大統領も背広にネクタイというスタイルを崩すことは少ない。大柄な肥満体形にジーンズは似合わないということがよく分かっているのだろう。ただ、太めのサスペンダーを使うなどすれば、それはそれで愛嬌がでるとも思うのだが。

ヒラリー・クリントンのファッションの変化

最近では女性政治家のファッションも注目される。

オバマ大統領のライバルで、その後継を狙ったヒラリー・クリントン、つまりクリントン大統領の夫人は、ファッションセンスが劇的に改善された1人だろう。

93年1月、夫の大統領就任式に立ち会ったヒラリー氏は、チェック柄のスーツ上下を地味に着ていた。庶民的な感じはするものの、「洗練された」という形容詞は全く当てはまらない。

彼女の学生時代の写真をみると、ファッションなどにはお構いなしという感じだ。太い緑の分厚い眼鏡をかけて、「まじめなワーキング女子」という雰囲気を醸し出している。

実際、クリントン政権初期、彼女はファースト・レディーとして医療保険改革問題に首を突っ込み失敗している。ファッションなどより政策というヒラリー氏の存在は、前任のブッシュ（父）大統領夫人のバーバラ氏が政治性を感じさせずに「アメリカ人の母」と慕われたのに比べても特異だった。

そんなヒラリー氏の雰囲気が変わったのは上院議員選挙に出馬するころから。アドバイザーの忠告に従い、

髪をうまくまとめてメイクもばっちり。着こなす服もなかなか洗練され、知性的な印象を与えるのに成功していた。

16年の大統領選挙でヒラリー氏は最終的にトランプ氏に敗れるが、女性ということもあり、常にそのファッションは注目された。

ある日は真紅のチャイナドレス風の上着に黒のズボン、別の日はグレーのパンツスーツに鮮やかなオレンジ色のインナーというスタイル。過度な派手さは避けつつも、豊かな色彩感覚を強調するようないでたちが多かった。

ヒラリー氏といえば、女性に対する「ガラスの天井」を打ち破る候補としても期待されたが、ワシントン・ポスト紙でファッションを担当しているロビン・ギブハン記者に取材すると、当時こう話していた。

「男性候補者には『紺の背広に赤のネクタイ』という定番があるので、それを基準に良しあしが決められる。しかし、女性候補には比較するものがない。つまりヒラリーは何を着ていても注目されてしまった」

実はこの記者が書いた記事が大きな論争になったことがある。

ヒラリー氏が上院議員だったころ、議会で演説する時V字型のインナーを着ていたため、胸の谷間が少し見えていた。

この記者はこれを材料に記事を執筆し、「誰もこんなものを見たくない」と写真付きで紹介した。

記事はポスト紙の電子版でアクセス数トップになるなど注目を浴びたが、直後から電話や投書が殺到。大半は女性からで「ポスト紙はタブロイドに成り下がったのか」「記事の内容は性差別そのもの」などといった批判がほとんどだった。

ヒラリー氏の事務所も支持者に「あの記事は下品で不適切」と書簡を送り、テレビもこの論戦に加わるなど騒ぎは拡大したが、同紙は最後まで「謝る必要はない」と突っぱね、この記者も「私は体の一部のことを記事にしたのではない。ヒラリーのネックラインのことを書いただけだ」と抗議を受け付けなかった。

ただ、この記事が議論になるのは、ヒラリー氏が女性だったから。来年の大統領選挙を目指した民主党の予備選挙の有力候補に残っているウォーレン、ハリスという2人の女性上院議員も、今後ファッションを含めた外見などが論争の的になることは避けられないだろう。

ちなみに、ギブハン記者はポスト紙の誇る名物記者。ジャーナリストのあこがれであるピューリッツァー賞

も受賞している。同紙のファッション欄に掲載される彼女の記事は固定ファンがいるといわれている。

批評はなかなか辛らつだ。現大統領の服装を「トランプの破滅的な洋服のチョイス」とばっさり切り捨てたかと思えば、「だぶだぶの背広に、超長めの赤いネクタイ。トランプは服装に関して新たな慣習の創造者になった」と皮肉たっぷりに批判している。

アメリカ流、パーティーの格付け

女性のファッションが最も注目されるのは、やはりパーティーの席だろう。

米国人はパーティー好きだ。「ハイソ」な人々が催すものから、庶民のバーベキューまで、週末はどこかで何かのイベントが開かれている。

それはワシントンも同じ。大統領就任のパーティーが幾晩にもわたって開かれるのは有名だし、さまざまな機会にさまざまな名目でホテルのボールルームを借り切った宴（うたげ）に紳士淑女が参加している。

そういう場に女性がどのようなドレスで来るかは注目される。それが大統領夫人であればなおさらで、現在のメラニア夫人も常に批評家の目にさらされている。

英国訪問時のエリザベス女王主催の晩さん会で着たイブニングドレスはそこそこの評判だったが、くだんのギブハン記者は「おとなしくて従順であることを示すもの以外ではなかった」などと面白みに欠けていると批判していた。

もちろんメラニア夫人だけではない。オバマ大統領のミシェル夫人も厳しい批評眼を潜り抜けてきた。初のアフリカ系アメリカ人の大統領夫人として、緊張も苦勞もあったとは思われるが、「ミシェル人気」も手伝い、ファッションでは及第点を与える雑誌などが多かった印象だ。

話は横道にそれるが、ワシントンのパーティーでは、誰を呼ぶか、呼ばれるかということが大きな関心事になる。ワシントンの専門誌によれば、この街には「Aランク」と称されるグループがあって、この人々が参加するパーティーの格は上がるのだという。

この「Aランク」の筆頭は大統領夫妻。トランプ氏になって以前よりも権威は落ちたと思われるが、米国の「コマンダー・イン・チーフ（最高司令官）」が黒のボータイを結んで出席すると、パーティーは盛り上がる。

大統領夫妻のほかは、議会の重鎮たちだ。今でいうならペロシ下院議長、マコネル共和党上院院内総務な

どの名前があがるはずだし、ロバーツ最高裁判所長官もその1人に数えられる。

以前は米国の中央銀行にあたる連邦準備制度理事会（FRB）の議長だったグリーンズパン氏と、その夫人で米NBCテレビの有名なキャスター、ミッチェル氏は確実にAリスト入りしていたが、現在のジェローム・パウエル議長はトランプ大統領に面罵されており、そのパーティー上の位置づけは微妙なところだろう。

着こなしの限界

政治家にはファッション・アドバイザーがつくことも珍しくない。大統領選挙ともなれば、「この集会は背広で」とか「この野外での遊説には工場労働者が集まってくるのでジーンズに」などのアドバイスをしている。以前取材した民主党のコミュニケーション・アドバイザーはこう話していた。

「どんな洋服を着るかは無視できない要素だ。時として候補者のイメージを決定づける」

しかし、長年米国の政治家を観察してきた議会上院歴史部のヒストリアン、ドン・リッチー氏はこう苦言を呈していた。

「確かに有権者は政治家のファッションに敏感に反応するようになってきた。大統領選挙の候補者などは自分がどういうイメージで見られるのかを大変気にする。しかし、重要なのは指導者としての威厳や権威をどうやって確立していくのかであり、どのような政策を展開するのかだ。ファッションで格好よく見えるからといって、その政治家が素晴らしい指導者になれるとは限らない」

